あ

志賀理和氣神社

赤き石　謂れ目出度き 志賀理和気

い

日の輪・月の輪形遺跡

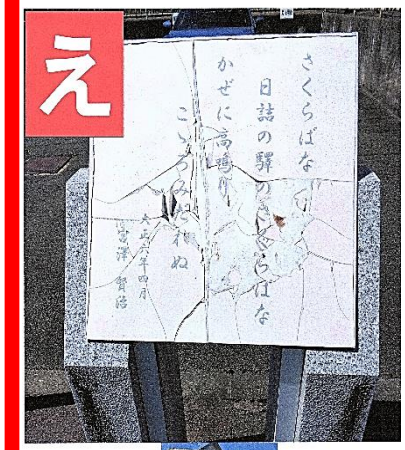
池に浮かぶ 勝利へのお告げ 源氏の旗印

う

日詰郡山駅

馬の旅 休みし駅は 郡山

え



賢治の歌碑

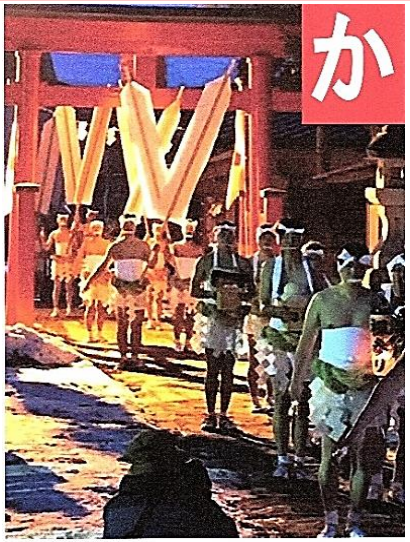
駅頭に 賢治の歌碑や 日詰駅

お

樋爪館跡

奥六郡 誇れや文化 樋爪館

か



志和八幡宮

篝火に 尽きせぬ願い 裸参り

き

佐比内金山の里

金山の 歴史を誇る 佐比内の里

く

三社稲荷
志和稲荷神社
志和古稲荷神社
白旗神社(個人所有)
古和霄神社の南隣

三社稲荷

草分けて 真澄歩みし 神の里

け

志和稲荷大杉

県下一 杉の神木 志和稲荷

こ

五郎沼経塚跡

後世に経典を残し極楽往生を願う経塚跡

志賀理和気神社

平安時代に創建された志賀(しか)理(り)和気(わけ)神社は、室町時代には「赤石大(だい)明(みょう)神(じん)」と呼ばれていました。伝承では、近くを流れる北上川の川底にあった「赤い石」に霊(れい)験(げん)を見い出し、神社の名称になりました。赤石にぶつかる水しぶきが「紫の波」に見えたことが「紫波」の地名の由来と伝えられています。

日の輪・月の輪形遺跡

源(みなもとの)頼(より)義(よし)・義家父子が安倍氏と戦った前九年合戦の際、源氏の旗に描かれた「太陽と三日月」が月明かりに照らされ、陣ケ岡の池に映し出されました。これを「勝利へのお告げ」と確信した源氏は、一気に厨川(くりやがわの)柵(さく)へ攻め入ったという伝承があります。合戦後、源氏は「日(ひ)の輪・月(つき)の輪」を象(かたど)った中島を築いたと伝えられています

日詰郡山駅

郡山は、日詰町・二日(ふつか)町(まち)・下町(しもまち)の総称で、高水寺城下を中心に形成された町(まち)場(ば)でした。盛岡と花巻の中間に位置する郡山は、奥州道中の整備によって宿駅(しゅくえき)が整備されると「郡山駅」と呼ばれました。外来商人や職人が定住し河岸(かし)が整備されると、人の往来や物流も増加し、志和郡の政治・社会・文化の拠点として発展しました

賢治の歌碑

日詰駅は、日本鉄道の駅として開業した紫波郡唯一の鉄道輸送の玄関口でした。人や物資を輸送するだけではなく、さまざまな文化も運んできました。日詰駅は、宮沢賢治の作品の舞台となり、構内には「さくらばな」の歌碑が建てられています。賢治は、近くの五郎沼や高水寺城跡を題材にした作品も残しています

樋爪館跡

志波郡を含むは「奥(おく)六郡」（胆沢・江刺・和賀・稗貫・志波・岩手郡）は、都がある中央から遠く辺境(へんきょう)の地と呼ばれ、胆沢郡とともにエミシ勢力の二大拠点でした。比爪館を中心に築かれた文化は、辺境に位置しながらも平泉文化を取り入れ、風土に合わせた独自の文化を築いてきました。この文化の独自性は、紫波町の文化の精神的な主軸になっています。

志和八幡宮

志和八幡宮の「五(ご)元日(がんにち)」の祭典は、源(げん)氏(じ)が前九年合戦の勝利を祝ったとする故事(こじ)に由来し、正月5日の未明に「大かがり火」を焚(た)き上げる伝統行事です。この祭典では、南部杜(とう)氏(じ)の発祥とされる権(ごん)兵(べ)衛(え)酒屋の蔵人(くらびと)が酒造り祈願として始めた「裸参り」が奉納されます。旧志和村の伝統文化や酒造文化を伝える貴重な民俗行事といえます。

佐比内金山の里

藩政時代の佐比内は、県内屈指の産金地でした。諸国から鉱山の技術者などが多数集まり、山間地に集落が誕生し、各地の文化が持ち込まれました。佐比内の文化には鉱山の繁栄や作業の無事を願った鉱夫たちの祈りが込められています。「からめ節」など鉱山由来の独自の文化が育まれ、「産金の里」として貴重な鉱山文化を伝えています。

三社稲荷

奥羽山系の麓(ふもと)には多くの神社が集積しています。志和稲荷・志和古(ふる)稲荷・水分神社は「志和の三社稲荷」と呼ばれ、五穀豊穣、無病息災を祈願する神社として親しまれてきました。江戸時代の民俗学者菅(すが)江(え)真(ま)澄(すみ)は、多(た)具(ぐ)那(な)川（滝名川）や志和稲荷神社のほか、志賀理和気神社・比爪館・五郎沼・走湯神社などの見聞(けんぶん)内容を旅行記に記(しる)しています

志和稲荷神社・大杉

志和稲荷神社は、前九年合戦の際、源(みなもとの)頼(より)義(よし)・義家父子が陣ケ岡に滞在中に、伏(ふし)見(み)稲荷神社から神霊を分(ぶん)祀(し)したと伝えています。境内(けいだい)にそびえる高さ45メートル、樹齢1200年余りの大杉は御神木とされ、県下一といわれます。この御神木は、延命長寿・縁結び・子孫繁栄に御(ご)利(り)益(やく)があるとされ、町内外から多くの参拝者が訪れます。

五郎沼経塚跡

経塚(きょうづか)は、法(ほ)華(け)経(きょう)などの仏教の経典(きょうてん)を後世に残すために築かれた塚です。五郎沼周辺に寺社が建立されるなど、極楽(ごくらく)往生(おうじょう)を願う人々の供(く)養(よう)の聖地・霊場(れいじょう)とされてきました。経塚は、山頂や神社の境内や境界に築かれることが多く、五郎沼経塚も聖と俗の領域を分ける結界の役目が期待されたかも知れません。

さ

逆さカシワ

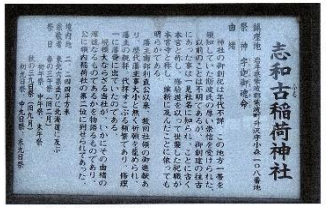
逆さガシワ 枝ぶり不思議 勝源院

し

熊野神社 佐比内館

神田を 守るは城か 熊野さん

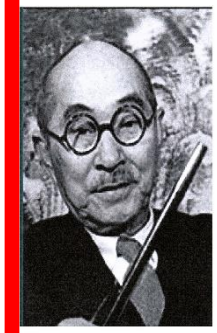
す



志和古稲荷神社

杉の洞 キツネこんこん 古稲荷

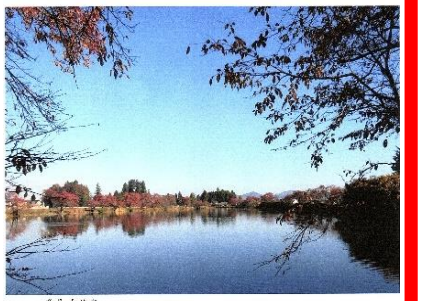
せ



野村胡堂

銭形平次 心は彦部 江戸育ち

そ



五郎沼

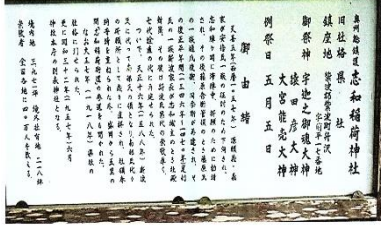
荘厳な 浄土庭園 五郎沼

た

長岡城跡

館山に 城を築きし 長岡氏

ち



志和稲荷神社

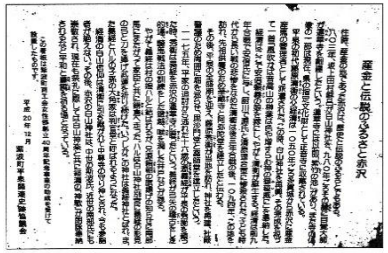
茅の輪くぐり コロナも退散 大祓え

つ

山屋館経塚

つづらの山道 経塚四つ 山屋館

て



義経伝説

伝説に 馬の訓練 赤沢郷

と

舟久保洞窟

洞窟に 快適生活 縄文人

逆ガシワ

カシワは上向きに直立する性質がありますが、勝(しょう)源(げん)院(いん)のカシワは直立しておらず、地面際(ぎわ)で四方に枝分かれして、そのまま地を這(は)うように立ち上がっています。根が枝になったような不思議な枝ぶりから「逆ガシワ」の異(い)名(みょう)で親しまれています。昭和初期に国の天然記念物に指定され、紫波町では唯一の国指定の天然記念物です

佐比内館跡・熊野神社

佐比内館は、遠野街道沿いの神田(じんでん)に築かれた中世城館です。斯波(しば)氏重臣の河村氏が本拠の大巻から佐比内に居館を移したと伝えられています。現在の熊野神社は、佐比内大峰(おおみね)の熊野権(ごん)現(げん)社(しゃ)(奥宮)を佐比内館の本丸跡に里宮として建立したものです。神田の地名は、神に稲の初(はつ)穂(ほ)を献ずる御(お)神(み)田(た)が由来かも知れません

志和古稲荷神社

志和古(ふる)稲荷神社は、古くは「古稲荷さん」と呼ばれ、志和稲荷神社とともに「志和稲荷両社」として南部氏の崇敬と保護を受けてきました。昭和20年代に御(ご)神(しん)木(ぼく)の大杉の空洞(くうどう)から「白きつね」のミイラが発見されました。キツネは稲荷の神がこの世に見える形で遣(つか)わした「神の使い」とされ、古(ふる)稲荷神社はアニメの聖地にもなっています。

野村胡堂

野村胡堂胡(こ)堂(どう)の代表作である『銭(ぜに)形(がた)平(へい)次(じ)捕(とり)物(もの)控(ひかえ)』は、神田明神下に住む銭形平次が卓越した推理と「投げ銭(ぜに)」によって事件を解決する歴史小説です。胡堂が描く平次の世界は、江戸を舞台にしていますが「弱い立場にある人を許し、偽(ぎ)善(ぜん)者(しゃ)を罰する」という姿勢が貫(つらぬ)かれています。農民の子として育った彦部での苦楽体験が原点にあるのかも知れません

五郎沼

比爪館は、役所・寺院・居館などの機能をもつ複合的な城館で、その規模・格式は平泉と比較して遜色がないものと推測されています。五郎沼のほとりには廃寺になった大(だい)荘(しょう)厳(ごん)寺(じ)が境内を構えていました。その寺域には平泉の無(む)量(りょう)光(こう)院(いん)と同じように、極楽浄土をこの世に再現しようとする浄土庭園の存在が推測されています。

長岡城

長岡城は、遠野街道沿いの東長岡の館山(たてやま)に築かれた中世長岡氏の城館です。「六日町」の地名は城下市(いち)の名残です。近くには北上川舟運(しゅううん)の船着き場があり、小街区を形成していたと考えられます。長岡氏の事績は不明な部分がありますが、長岡城は八坂神社とともに長岡の歴史や文化を物語る文化遺産といえます

志和稲荷神社

志和稲荷神社の拝殿前には「茅(ち)の輪」と呼ばれる大きな輪があります。茅の輪をくぐることを「茅の輪くぐり」といい、心身を清めて災厄(さいやく)を祓(はら)い無病(むびょう)息災(そくさい)を祈願するものです。この行事の起源は『釈(しゃく)日(に)本(ほん)紀(ぎ)』に引用された「疫病(えきびょう)が流行したなら、茅の輪を腰に付けると免(まぬ)かれる」という蘇(そ)民(みん)将(しょう)来(らい)の逸(いつ)話(わ)に由来します。

山屋館経塚

山(やま)屋(や)館(だて)経(きょう)塚(づか)は、赤沢山屋に築かれた4基の経塚です。経塚は末法(まっぽう)思想の影響を受け、法(ほ)華(け)経(きょう)などの経典を後世に残すために築かれた塚です。この経塚から経典を入れる常滑(とこなめ)産や珠(す)洲(ず)産の壺(つぼ)が出土しました。この経塚は、道路改良工事の際に発見され、現在地に移築復元されました。紫波町では発掘調査が行われた数少ない経塚です。

義経伝説

源(みなもとの)義(よし)経(つね)が兄頼(より)朝(とも)に宛てた「腰(こし)越(ごえ)状(じょう)」では、頼朝軍に加わる以前は「辺(へん)土(ど)遠国(おんごく)を栖(す)みか」にしたと記録されています。赤沢では義経の乗馬・武術の訓練や地元娘との恋物語が伝承されてきました。義経が赤沢で過ごした記録は確認できませんが、古くから「義経伝説」が先人によって語り継がれてきた歴史の郷(さと)といえます。

舟久保洞窟

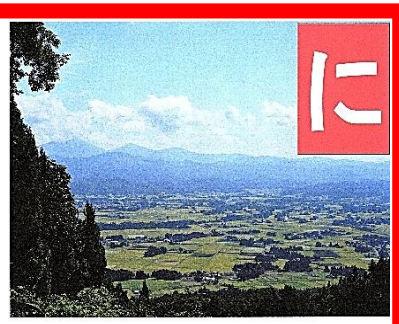
赤沢の舟久保洞窟は、石灰岩層にできた横穴洞穴です。洞窟内では美しい鍾(しょう)乳(にゅう)石(せき)や石(せき)筍(じゅん)が見られます。縄文時代後期・晩期の土器や骨(こつ)角器(かくき)のほか、ニホンジカ・イノシシ・クマなどの獣(じゅう)骨(こつ)が出土しています。また、寒冷期でも氷点下になることは少なく、縄文時代でも快適な生活を送ることができた洞窟住居跡です。

な

大巻館

南朝の 歴史を刻む 河村館

に



新山

新山で上から眺める紫波町を

澄んだ空気と緑の町並み

ぬ

箱清水板碑群

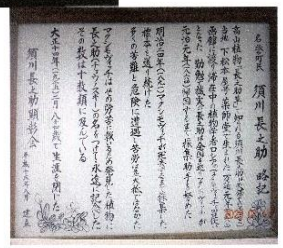
沼端に ここは霊場 箱清水

ね

赤沢白山神社

願い込め 登る二百三十段 白山社

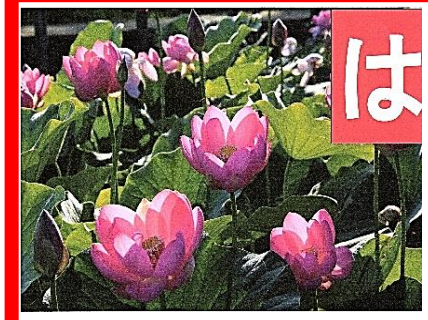
の



須川長之助

野の草を 旅の土産に 長之助

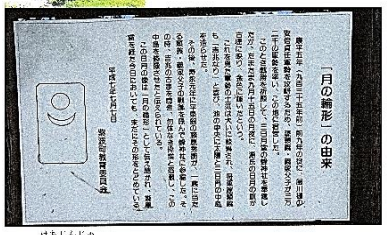
は



古代蓮

八百年眠り続けて廻り 里帰りした古代蓮

ひ

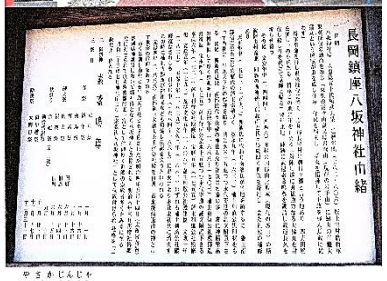


蜂神社

日月の水面に源 頼 義は

「吉兆なり」と喜ぶ

ふ



八坂神社

古くは、斯波氏・南部盛岡藩主の

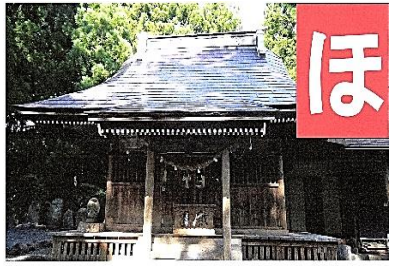
崇敬厚く八坂神社

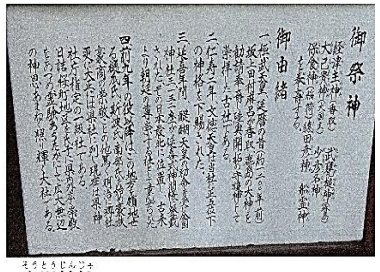
へ

樋爪館跡

平安の 文化を広めし 樋爪館

ほ





走湯神社

奉納するは 鏑矢二本 走湯権現

大巻館跡

大巻館は、彦部館山(たてやま)に築かれた城館です。鎌倉御(ご)家(け)人(にん)河村氏の居館で「河村館」とも呼ばれます。大正初期に「大(たい)正(しょう)園(えん)」として改修・整備された歴史があります。河村氏の事績について不明な部分がありますが、南北朝(なんぼくちょう)時代は公(く)家(げ)方(かた)の南朝に与(くみ)し、室町時代には志波郡領主斯波(しば)氏の重臣として佐比内館を居館にしていました。

新山

新山(にいやま)山頂の新山(にいやま)神社は、古くは「新山(しんざん)権現(ごんげん)」と呼ばれ、「新(しん)山(ざん)寺(じ)」が別当を務めていました。新山には多くの伽(が)藍(らん)や坊(ぼう)舎(しゃ)が建てられた聖地のため、盛岡藩は新山を鎮(ちん)山(ざん)と位置づけ、八戸藩が成立しても盛岡藩領として掌握(しょうあく)し続けました。山頂には展望台が整備され、紫波扇状地に広がる散(さん)居(きょ)集落、緑豊かな田園景観を一望できます。

古代ハス

五郎沼のハス池では、古代ハスが夏季に美しい大輪の花を咲かせます。このハスは、中尊寺金色堂から発見された種子を現代科学の力によって開花させたものです。「中尊寺ハス」と名付けられた古代ハスは、中尊寺から五郎沼に株分けされました。八百余年の長い眠りから覚め、時空を超えて里帰りしたことになります。

蜂神社

前九年合戦の際、源氏の旗に描かれた「太陽と三日月」が陣ケ岡の池の水面(みなも)に映し出されました。源氏はこれを「勝利の吉(きっ)兆(ちょう)なり」と喜び、士気を高め一気に厨川柵を攻め安倍氏に勝利したという故事が伝えられています。勝利した源氏は、報恩として「日の輪・月の輪」を象(かたど)った中島を築いたと伝承されています。

長岡八坂神社

長岡八坂神社は、斯波(しば)氏や南部氏から崇敬(すうけい)されてきました。藩主南部利(とし)直(なお)は当社に「牛頭(ごず)天王(てんのう)」の社号を与えて保護し、志和稲荷社参詣の帰路には必ず立ち寄ったと伝えられています。明治政府は「天王」と「天皇」が重なることを不敬として社名の変更を求め、「牛頭天王」から「八坂神社」に名称を変えた歴史があります。

箱清水板碑群

史跡比爪館跡が所在する箱(はこ)清(し)水(みず)の地名は、名水が湧(わ)く箱(はこ)清水(すず)に由来します。領主が樋爪氏から斯波(しば)氏に変わっても、大荘厳(だいしょうごん)寺の境内(けいだい)や五郎沼周辺は霊場(れいじょう)・聖地として、さまざまな信仰を形に表した供養(くよう)碑(ひ)や経塚(きょうづか)が築かれました。五郎沼の沼端(ぬまば)たでは、不(ふ)動(どう)明(みょう)王(おう)を絵画的に線刻した不動明王絵(え)像(ぞう)碑(ひ)が当時の信仰の姿を伝えています。

赤沢白山神社

赤沢白山神社は、およそ23 0 段の階段を昇り切った音(おと)高山(たかやま)の山頂に鎮(ちん)座(ざ)します。古くは「白(はく)山(さん)宮(ぐう)」と呼ばれ、一帯には蓮(れん)花(げ)寺(じ)が山岳伽(が)藍(らん)を構え、多くの平(へい)安(あん)仏(ぶつ)が安置されていました。音高山の麓(ふもと)や周辺には鎌倉時代の板碑などが集積する聖域となっていますが、近年この聖域に山城の遺構が確認されています。

比爪館跡　平安の　文化を広めし　比爪館

比(ひ)爪(づめ)館は、平泉藤原氏が志波郡に配置した北方支配の拠点です。比爪館跡は、平泉の都市理念が平泉以外で展開された数少ない平泉関連遺跡で、「第二の平泉」と呼ぶにふさわしい権威と格式を誇っています。その文化的影響は、比爪館跡周辺の関連遺跡のほか、中核部を取り巻く周縁の寺社・経(きょう)塚(づか)・平(へい)安(あん)仏(ぶつ)などの仏教遺産に及んでいます。

須川長之助

名誉町民須川長之助は、水分下(しも)松本出身の植物採集家です。牧(まき)野(の)寡(とみ)太(た)郎(ろう)が命名した「チョウノスケソウ」の発見者として知られています。日本列島のほぼ全域の植物を採集し、その標本をロシアの植物園に送り続け、世界の植物分類学の発展に多大な功績を残しています。「チョウノスキー」の学名が彼の功績を雄弁に物語っています。

走湯神社

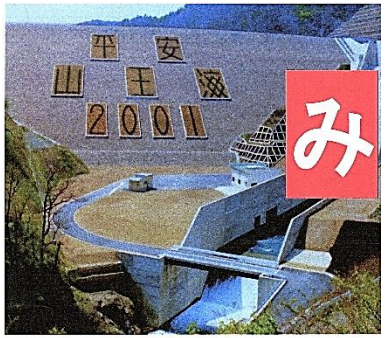
走(そう)湯(とう)神社は、古くは「走(そう)湯(とう)大権現(だいごんげん)」と呼ばれ、熱(あた)海(み)の湧(わ)き出る霊湯(れいとう)「走り湯」を神格化したものです。源(みなもとの)頼(より)朝(とも)は陣ケ岡に滞在した際、「走湯権現に奉(たてまつ)る」と称して鏑(かぶら)矢(や)二本を欅(けやき)に射立てたことが『吾(あ)妻(づま)鏡(かがみ)』に記(しる)されています。頼朝にとって伊(い)豆(ず)山(さん)神社から分祀された走湯大権現が遠方の「比爪」にあったことに感慨を覚えたのかも知れません。

ま

承慶橋跡

町と村 つなぐ架け橋 承慶橋

み



山王海ダム

水喧嘩 あってはならぬと 山王海

む

長岡八坂神社

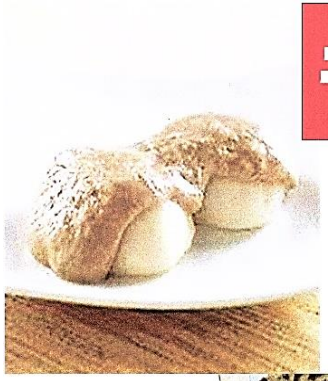
村人の 信仰厚き 牛頭天王

め

陣ケ岡

名将の 滞陣あまた 陣ケ岡

も



食文化

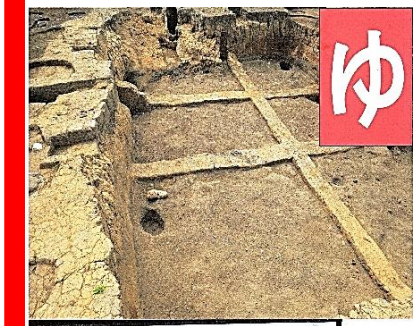
餅振舞い 胡麻に小豆に 胡桃餅

や

東根山

山姿 こたつに似せて 東根山

ゆ



吾妻鏡による 樋爪館

由緒知る 吾妻鏡に 樋爪館

よ

佐藤芳光氏 撮影より

水飢饉

揚水の 静かに速し 稲植える

わ

水分神社

湧き出ずる水 幾千年

水分（みくまり）の里

承継橋

承慶(しょうけい)橋(ばし)は、幕末に郡山の豪商金(かね)子(こ)七(しち)郎(ろ)兵(べ)衛(え)が、城山東側の北上川に私財を投じて普請した橋です。この橋は、藩主南部利済(としただ)が志和稲荷の帰路に長岡八坂神社を参拝するために架けた「御(お)成(なり)橋(ばし)」と伝えられていますが、北上川東西の村や町をつなぐ重要な役割を果たしました。普請には郡山城跡の石材が利用され、擬宝珠(ぎぼし)が取り付けられました。

山王海ダム

滝名川は、志和稲荷神社前で本流方と支流方の二つの水系に分岐されます。一つの用水源を盛岡藩と八戸藩で利用することから、水系同士の間で悲惨な水争いが起こり、死者まで出した悲痛な歴史があります。慢性的な水不足や水争いは、当時「東洋一のアースダム」といわれた「山王海ダム」の完成によって終止符が打たれました

長岡八坂神社

長岡八坂神社は、かつては「牛頭(ごず)天王」と呼ばれていました。牛頭天王は、疫(やく)病(びょう)を広める疫(やく)病(びょう)神(がみ)として恐れられましたが、逆にこれを丁(てい)重(ちょう)に祀(まつ)り鎮(しず)めることで疫病を退散させる除疫の神、さらには農業神など万能な神とされました。八坂神社は、長い歴史と格式がある神社として村人から厚く信仰されてきました。

陣ケ岡陣営跡

陣ケ岡は、古くから交通・軍事の要地として知られ、坂上田村麻呂(さかのうえのたむらまろ)・源(みなもとの)頼(より)義(よし)・源義家・南部信(のぶ)直(なお)・蒲(がも)生(うじ)氏(うじ)郷(さと)など多くの名将が滞陣(たいじん)したと伝えられています。奥州合戦では、源(みなもとの)頼(より)朝(とも)が陣ケ岡に一週間滞在したことが『吾妻鏡』に記(しる)されています。陣ケ岡は、前九年合戦、奥羽合戦、戦国期の合戦など、時代の変革期に登場する重要な史跡です。

食文化

古来、神聖な食べ物とされてきた「もち」は、自然の恵みに感謝し五穀豊穣、平安息災を祈る信仰と結びつき、神仏に供えられてきました。また、季節の行事や人生の節目など、「ハレ」の日の御(ご)馳(ち)走(そう)として振舞われて来ました。さまざまな素材を「もち」に絡(から)める「もち食文化」が現代に継承されています。

東根山

東(あずま)根(ね)山(さん)は、山(やま)姿(すがた)が台形に似ているため「こたつ山」とも呼ばれます。豊かな湧水(ゆうすい)をもたらす広葉樹の森が広がり、周辺の田園地帯を潤しています。麓(ふもと)には水分神社の奥宮(おくみや)が、水田地帯には里宮(さとみや)が鎮座します。宮沢賢治の親友である藤原嘉(か)藤(とう)治(じ)は、賢治の理想の村づくりの精神を実践するため、東根山麓の開拓や生活改善に尽力したことで知られています。

樋爪館跡

比爪館は、樋爪俊衡(としひら)の居館として鎌倉幕府の正史『吾(あ)妻(づま)鏡(かがみ)』に登場します。この館は、平泉藤原氏の北方交易を担った志波郡の政治・行政上の拠点と考えられています。館の外側に広がる遺跡群は平泉に匹敵し、平泉関連遺跡の中では最大規模といわれます。比爪館は、奥州合戦の際、樋爪俊衡の手で焼かれ、その遺(い)構(こう)は地中に眠ったままです。

水飢饉(電気揚水)

大正末期から昭和初期にかけ、滝名川中・下流の旧赤石村は、水不足の村として全国的に知られていました。水不足の対策として北上川からの電気ポンプによる揚水(ようすい)事業が導入されました。電気揚水によって計画な田植えができるようになりましたが、「山王海ダム」の完成によって電気揚水はその使命を終えました。

水分神社

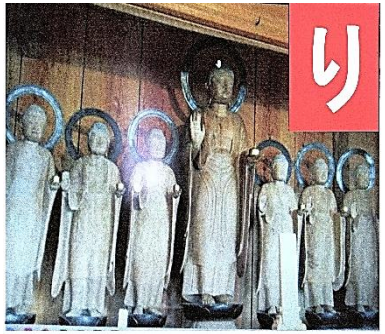
東(あずま)根(ね)山(さん)麓(ふもと)の水分(みずわけ)神社は、古くは「水分(みずわけ)大明神」と呼ばれ、近世初期に用水繁盛のため創建されたと伝えられています。「宇(う)迦(か)之(の)御(み)魂(たまの)命(みこと)」を祭神として、志和稲荷・志和古稲荷とともに信仰の礎(いしずえ)になっていました。明治期に祭神を「水(みく)分(まり)之(の)神(かみ)」、さらに「水(みず)波(は)能(の)売(めの)命(みこと)」に書き改め、名実ともに「水分(みくまり)の里」になっています。

ら

勝源院の逆カシワ

羅漢様 仲良く遊ぶ 門の中

り



七仏薬師像

凛として 七つ薬師の 立ち姿

る

蜂神社

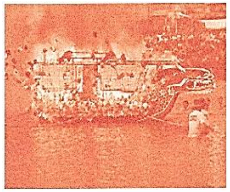
瑠璃色の 天にそびえし 一の鳥居

れ

南部杜氏

歴史ある 郷土の地酒 蔵四つ

ろ



来迎寺

六字名号 願いを込めて 川流し

勝源院逆さカシワ

勝源院(しょうげんいん)は、高水寺城跡に境内(けいだい)を構える曹洞宗(そうとうしゅう)の寺院です。寺伝では高水寺斯波氏の帰依(きえ)を得て開山し、江戸時代初期に花巻雄(ゆう)山(ざん)寺(じ)の末寺として再興されたと伝えています。参道入口には重厚・巨大な山門がそびえ、二階部分には十(じゅう)六(ろく)羅(ら)漢(かん)像(ぞう)が安置されています。この山門は、江戸時代末期に南日詰村の村人(むらびと)などの寄進によって建立されました。

七仏薬師像

赤沢薬師堂には中尊(ちゅうぞん)の左右に小さな脇(わき)尊(そん)を3体ずつ従えた七仏薬師像が祀られています。廃寺になった蓮(れん)花(げ)寺(じ)に安置されていた像と考えられています。中尊の高さは約1．3 メートルに及び、中尊と脇尊6体の七仏がほぼ制作時の状態を維持しています。このような形式の例は少なく、紫波町が全国に誇ることできる貴重な平安仏(へいあんぶつ)といえます。

蜂神社

奥州合戦の際、源(みなもとの)頼(より)朝(とも)は陣ケ岡蜂(はち)神社に一週間宿営したことが『吾妻(あづま)鏡(かがみ)』に記(しる)されています。蜂神社は、藩政時代には「八幡堂」と呼ばれていましたが、明治期に「蜂神社」と改称しています。陣ケ岡丘陵の西側遠方の田園地帯には朱(しゅ)塗(ぬ)りの巨大な「一の鳥居」が瑠璃(るり)色(いろ)の天にそびえ建っています。

南部杜氏

南部杜(とう)氏(じ)の源流は、近江商人村井権(ごん)兵(べ)衛(え)が旧志和村に伝えた池田流とされています。大坂池田流の「澄(す)み酒」の醸造技術が「権(ごん)兵(べ)衛(え)酒屋」に取り入れられ、地元志和郡の杜氏に伝えられました。紫波町では、4つの酒蔵が「南部流・南部杜氏」の伝統的な造りに、新たな技術や多様な嗜(し)好(こう)を融合させ「南部杜氏発祥の地」にふさわしい酒造りが行われています。

来迎寺

来迎寺(らいこうじ)は、日詰町発祥の地といわれる習(ならい)町(まち)に建立された浄土宗の寺院です。すべての仏・菩(ぼ)薩(さつ)の名前は名(みょう)号(ごう)といわれます。浄土門系では「南(な)無(む)阿(あ)弥(み)陀(だ)仏(ぶつ)」を「六(ろく)字(じ)の名号」といいます。「南無」は帰依(きえ)を意味し、阿弥陀仏への帰依を表しています。来迎寺では「南無阿弥陀仏」と書かれた短冊(たんざく)を北上川に流す「御(お)名(みょう)号(ごう)流(なが)し」が盆行事として行われます。

お

樋爪館跡（ひづめたてあと）

奥六郡（おくろくぐん）
誇れや文化（ほこ ぶんか）
樋爪館（ひづめだて）

え

賢治の歌碑（けんじ かひ）

駅頭に（えきとう）
賢治の歌碑や（けんじ かひ）
日詰駅（ひづめえき）

う

日詰郡山駅（ひづめこおりやまえき）

馬の旅（うま たび）
休みし駅は（やすみ えき）
郡山（こおりやま）

い

日の輪・月の輪形遺跡（ひ わ つき わがたいせき）

池に浮かぶ（いけ う）
勝利へのお告げ（しょうり つ）
源氏の旗印（げんじ はたじるし）

あ

志賀理和氣神社（しかりわけじんじゃ）

赤き石（あか いし）
謂れ目出度き（いわ めでた）
志賀理和気（しかりわけ）

こ

五郎沼経塚跡（ごろうぬまきょうづかあと）

後世に経典を残し（こうせい きょうてん のこし）
極楽往生を願う（ごくらくおうじょう ねが）
経塚跡（きょうづかあと）

け

志和稲荷大杉（しわいなりおおすぎ）

県下一（けんかいち）
杉の神木（すぎ しんぼく）
志和稲荷（しわいなり）

く

三社稲荷（さんじゃいなり）

草分けて（くさわ）
真澄歩みし（ますみあゆ）
神の里（かみ さと）

き

佐比内金山の里（さひないきんざん さと）

金山の（きんざん）
歴史を誇る（れきし ほこ）
佐比内の里（さひない さと）

か

志和八幡宮（しわはちまんぐう）

篝火に（かがりび）
尽きせぬ願い（つ ねが）
裸参り（はだかまい）

志賀理和気神社

平安時代に創建された志賀(しか)理(り)和気(わけ)神社は、室町時代には「赤石大(だい)明(みょう)神(じん)」と呼ばれていました。伝承では、近くを流れる北上川の川底にあった「赤い石」に霊(れい)験(げん)を見い出し、神社の名称になりました。赤石にぶつかる水しぶきが「紫の波」に見えたことが「紫波」の地名の由来と伝えられています。

日の輪・月の輪形遺跡

源(みなもとの)頼(より)義(よし)・義家父子が安倍氏と戦った前九年合戦の際、源氏の旗に描かれた「太陽と三日月」が月明かりに照らされ、陣ケ岡の池に映し出されました。これを「勝利へのお告げ」と確信した源氏は、一気に厨川(くりやがわの)柵(さく)へ攻め入ったという伝承があります。合戦後、源氏は「日(ひ)の輪・月(つき)の輪」を象(かたど)った中島を築いたと伝えられています

日詰郡山駅

郡山は、日詰町・二日(ふつか)町(まち)・下町(しもまち)の総称で、高水寺城下を中心に形成された町(まち)場(ば)でした。盛岡と花巻の中間に位置する郡山は、奥州道中の整備によって宿駅(しゅくえき)が整備されると「郡山駅」と呼ばれました。外来商人や職人が定住し河岸(かし)が整備されると、人の往来や物流も増加し、志和郡の政治・社会・文化の拠点として発展しました

賢治の歌碑

日詰駅は、日本鉄道の駅として開業した紫波郡唯一の鉄道輸送の玄関口でした。人や物資を輸送するだけではなく、さまざまな文化も運んできました。日詰駅は、宮沢賢治の作品の舞台となり、構内には「さくらばな」の歌碑が建てられています。賢治は、近くの五郎沼や高水寺城跡を題材にした作品も残しています

樋爪館跡

志波郡を含むは「奥(おく)六郡」（胆沢・江刺・和賀・稗貫・志波・岩手郡）は、都がある中央から遠く辺境(へんきょう)の地と呼ばれ、胆沢郡とともにエミシ勢力の二大拠点でした。比爪館を中心に築かれた文化は、辺境に位置しながらも平泉文化を取り入れ、風土に合わせた独自の文化を築いてきました。この文化の独自性は、紫波町の文化の精神的な主軸になっています。

志和八幡宮

志和八幡宮の「五(ご)元日(がんにち)」の祭典は、源(げん)氏(じ)が前九年合戦の勝利を祝ったとする故事(こじ)に由来し、正月5日の未明に「大かがり火」を焚(た)き上げる伝統行事です。この祭典では、南部杜(とう)氏(じ)の発祥とされる権(ごん)兵(べ)衛(え)酒屋の蔵人(くらびと)が酒造り祈願として始めた「裸参り」が奉納されます。旧志和村の伝統文化や酒造文化を伝える貴重な民俗行事といえます。

佐比内金山の里

藩政時代の佐比内は、県内屈指の産金地でした。諸国から鉱山の技術者などが多数集まり、山間地に集落が誕生し、各地の文化が持ち込まれました。佐比内の文化には鉱山の繁栄や作業の無事を願った鉱夫たちの祈りが込められています。「からめ節」など鉱山由来の独自の文化が育まれ、「産金の里」として貴重な鉱山文化を伝えています。

三社稲荷

奥羽山系の麓(ふもと)には多くの神社が集積しています。志和稲荷・志和古(ふる)稲荷・水分神社は「志和の三社稲荷」と呼ばれ、五穀豊穣、無病息災を祈願する神社として親しまれてきました。江戸時代の民俗学者菅(すが)江(え)真(ま)澄(すみ)は、多(た)具(ぐ)那(な)川（滝名川）や志和稲荷神社のほか、志賀理和気神社・比爪館・五郎沼・走湯神社などの見聞(けんぶん)内容を旅行記に記(しる)しています

志和稲荷神社・大杉

志和稲荷神社は、前九年合戦の際、源(みなもとの)頼(より)義(よし)・義家父子が陣ケ岡に滞在中に、伏(ふし)見(み)稲荷神社から神霊を分(ぶん)祀(し)したと伝えています。境内(けいだい)にそびえる高さ45メートル、樹齢1200年余りの大杉は御神木とされ、県下一といわれます。この御神木は、延命長寿・縁結び・子孫繁栄に御(ご)利(り)益(やく)があるとされ、町内外から多くの参拝者が訪れます。

五郎沼経塚跡

経塚(きょうづか)は、法(ほ)華(け)経(きょう)などの仏教の経典(きょうてん)を後世に残すために築かれた塚です。五郎沼周辺に寺社が建立されるなど、極楽(ごくらく)往生(おうじょう)を願う人々の供(く)養(よう)の聖地・霊場(れいじょう)とされてきました。経塚は、山頂や神社の境内や境界に築かれることが多く、五郎沼経塚も聖と俗の領域を分ける結界の役目が期待されたかも知れません。

そ

五郎沼（ごろうぬま）
荘厳な（そうごん）
浄土庭園（じょうどていえん）
五郎沼（ごろうぬま）

せ

野村胡堂（のむらこどう）
銭形平次（ぜにがたへいじ）
心は彦部（こころ ひこべ）
江戸育ち（えどそだ）

す

志和古稲荷神社（しわふるいなりじんじゃ）
杉の洞（すぎ ほら）
キツネこんこん（きつね）
古稲荷（ふるいなり）

し

熊野神社佐比内館（くまのじんじゃさひないたて）
神田を守るは（じんでん まも）
城か（しろ）
熊野さん（くまの）

さ

逆さカシワ（さか かしわ）
逆さガシワ（さか かしわ）
枝ぶり不思議（えだ ふしぎ）
勝源院（しょうげんいん）

と

舟久保洞窟（ふなくぼどうくつ）
洞窟に（どうくつ）
快適生活（かいてきせいかつ）
縄文人（じょうもんじん）

て

義経伝説（よしつねでんせつ）
伝説に（でんせつ）
馬の訓練 赤沢郷（うま くんれん あかざわごう）

つ

山屋館経塚（やまやたてきょうづか）
つづらの山道（やまみち）
経塚四つ（きょうづかよっ）
山屋館（やまやだて）

ち

志和稲荷神社（しわいなりじんじゃ）
茅の輪くぐり（ちわ）
コロナも退散（ころな たいさん）
大祓え（おおはら）

た

長岡城跡（ながおかじょうあと）
館山に（たてやま）
城を築きし（しろ きず）
長岡氏（ながおかし）

逆ガシワ

カシワは上向きに直立する性質がありますが、勝(しょう)源(げん)院(いん)のカシワは直立しておらず、地面際(ぎわ)で四方に枝分かれして、そのまま地を這(は)うように立ち上がっています。根が枝になったような不思議な枝ぶりから「逆ガシワ」の異(い)名(みょう)で親しまれています。昭和初期に国の天然記念物に指定され、紫波町では唯一の国指定の天然記念物です

佐比内館跡・熊野神社

佐比内館は、遠野街道沿いの神田(じんでん)に築かれた中世城館です。斯波(しば)氏重臣の河村氏が本拠の大巻から佐比内に居館を移したと伝えられています。現在の熊野神社は、佐比内大峰(おおみね)の熊野権(ごん)現(げん)社(しゃ)(奥宮)を佐比内館の本丸跡に里宮として建立したものです。神田の地名は、神に稲の初(はつ)穂(ほ)を献ずる御(お)神(み)田(た)が由来かも知れません

志和古稲荷神社

志和古(ふる)稲荷神社は、古くは「古稲荷さん」と呼ばれ、志和稲荷神社とともに「志和稲荷両社」として南部氏の崇敬と保護を受けてきました。昭和20年代に御(ご)神(しん)木(ぼく)の大杉の空洞(くうどう)から「白きつね」のミイラが発見されました。キツネは稲荷の神がこの世に見える形で遣(つか)わした「神の使い」とされ、古(ふる)稲荷神社はアニメの聖地にもなっています。

野村胡堂

野村胡堂胡(こ)堂(どう)の代表作である『銭(ぜに)形(がた)平(へい)次(じ)捕(とり)物(もの)控(ひかえ)』は、神田明神下に住む銭形平次が卓越した推理と「投げ銭(ぜに)」によって事件を解決する歴史小説です。胡堂が描く平次の世界は、江戸を舞台にしていますが「弱い立場にある人を許し、偽(ぎ)善(ぜん)者(しゃ)を罰する」という姿勢が貫(つらぬ)かれています。農民の子として育った彦部での苦楽体験が原点にあるのかも知れません

五郎沼

比爪館は、役所・寺院・居館などの機能をもつ複合的な城館で、その規模・格式は平泉と比較して遜色がないものと推測されています。五郎沼のほとりには廃寺になった大(だい)荘(しょう)厳(ごん)寺(じ)が境内を構えていました。その寺域には平泉の無(む)量(りょう)光(こう)院(いん)と同じように、極楽浄土をこの世に再現しようとする浄土庭園の存在が推測されています。

長岡城

長岡城は、遠野街道沿いの東長岡の館山(たてやま)に築かれた中世長岡氏の城館です。「六日町」の地名は城下市(いち)の名残です。近くには北上川舟運(しゅううん)の船着き場があり、小街区を形成していたと考えられます。長岡氏の事績は不明な部分がありますが、長岡城は八坂神社とともに長岡の歴史や文化を物語る文化遺産といえます

志和稲荷神社

志和稲荷神社の拝殿前には「茅(ち)の輪」と呼ばれる大きな輪があります。茅の輪をくぐることを「茅の輪くぐり」といい、心身を清めて災厄(さいやく)を祓(はら)い無病(むびょう)息災(そくさい)を祈願するものです。この行事の起源は『釈(しゃく)日(に)本(ほん)紀(ぎ)』に引用された「疫病(えきびょう)が流行したなら、茅の輪を腰に付けると免(まぬ)かれる」という蘇(そ)民(みん)将(しょう)来(らい)の逸(いつ)話(わ)に由来します。

山屋館経塚

山(やま)屋(や)館(だて)経(きょう)塚(づか)は、赤沢山屋に築かれた4基の経塚です。経塚は末法(まっぽう)思想の影響を受け、法(ほ)華(け)経(きょう)などの経典を後世に残すために築かれた塚です。この経塚から経典を入れる常滑(とこなめ)産や珠(す)洲(ず)産の壺(つぼ)が出土しました。この経塚は、道路改良工事の際に発見され、現在地に移築復元されました。紫波町では発掘調査が行われた数少ない経塚です。

義経伝説

源(みなもとの)義(よし)経(つね)が兄頼(より)朝(とも)に宛てた「腰(こし)越(ごえ)状(じょう)」では、頼朝軍に加わる以前は「辺(へん)土(ど)遠国(おんごく)を栖(す)みか」にしたと記録されています。赤沢では義経の乗馬・武術の訓練や地元娘との恋物語が伝承されてきました。義経が赤沢で過ごした記録は確認できませんが、古くから「義経伝説」が先人によって語り継がれてきた歴史の郷(さと)といえます。

舟久保洞窟

赤沢の舟久保洞窟は、石灰岩層にできた横穴洞穴です。洞窟内では美しい鍾(しょう)乳(にゅう)石(せき)や石(せき)筍(じゅん)が見られます。縄文時代後期・晩期の土器や骨(こつ)角器(かくき)のほか、ニホンジカ・イノシシ・クマなどの獣(じゅう)骨(こつ)が出土しています。また、寒冷期でも氷点下になることは少なく、縄文時代でも快適な生活を送ることができた洞窟住居跡です。

の

すかわちょうのすけ
須川長之助

野の草を
旅の土産に
長之助

ね

あかざわはくさんじんじゃ
赤沢白山神社

願い込め
登る二百三十段
白山社

ぬ

はこしみずいたびぐん
箱清水板碑群

沼端に
ここは霊場
箱清水

に

にいやま
新山

新山で上から眺める
紫波町を澄んだ
空気と緑の町並み

な

おおまきだて
大巻館

南朝の
歴史を刻む
河村館

ほ

そうとうじんじゃ
走湯神社

奉納するは
鏑矢二本
走湯権現

へ

ひづめたてあと
樋爪館跡

平安の
文化を広めし
樋爪館

ふ

やさかじんじゃ
八坂神社

古くは、斯波氏・
南部盛岡藩主の
崇敬厚く八坂神社

ひ

はちじんじゃ
蜂神社

日月の水面に
源頼義は
「吉兆なり」と喜ぶ

は

こだいはす
古代蓮

八百年眠り
続けて廻り
里帰りした古代蓮

大巻館跡

大巻館は、彦部館山(たてやま)に築かれた城館です。鎌倉御(ご)家(け)人(にん)河村氏の居館で「河村館」とも呼ばれます。大正初期に「大(たい)正(しょう)園(えん)」として改修・整備された歴史があります。河村氏の事績について不明な部分がありますが、南北朝(なんぼくちょう)時代は公(く)家(げ)方(かた)の南朝に与(くみ)し、室町時代には志波郡領主斯波(しば)氏の重臣として佐比内館を居館にしていました。

新山

新山(にいやま)山頂の新山(にいやま)神社は、古くは「新山(しんざん)権現(ごんげん)」と呼ばれ、「新(しん)山(ざん)寺(じ)」が別当を務めていました。新山には多くの伽(が)藍(らん)や坊(ぼう)舎(しゃ)が建てられた聖地のため、盛岡藩は新山を鎮(ちん)山(ざん)と位置づけ、八戸藩が成立しても盛岡藩領として掌握(しょうあく)し続けました。山頂には展望台が整備され、紫波扇状地に広がる散(さん)居(きょ)集落、緑豊かな田園景観を一望できます。

古代ハス

五郎沼のハス池では、古代ハスが夏季に美しい大輪の花を咲かせます。このハスは、中尊寺金色堂から発見された種子を現代科学の力によって開花させたものです。「中尊寺ハス」と名付けられた古代ハスは、中尊寺から五郎沼に株分けされました。八百余年の長い眠りから覚め、時空を超えて里帰りしたことになります。

蜂神社

前九年合戦の際、源氏の旗に描かれた「太陽と三日月」が陣ケ岡の池の水面(みなも)に映し出されました。源氏はこれを「勝利の吉(きっ)兆(ちょう)なり」と喜び、士気を高め一気に厨川柵を攻め安倍氏に勝利したという故事が伝えられています。勝利した源氏は、報恩として「日の輪・月の輪」を象(かたど)った中島を築いたと伝承されています。

長岡八坂神社

長岡八坂神社は、斯波(しば)氏や南部氏から崇敬(すうけい)されてきました。藩主南部利(とし)直(なお)は当社に「牛頭(ごず)天王(てんのう)」の社号を与えて保護し、志和稲荷社参詣の帰路には必ず立ち寄ったと伝えられています。明治政府は「天王」と「天皇」が重なることを不敬として社名の変更を求め、「牛頭天王」から「八坂神社」に名称を変えた歴史があります。

箱清水板碑群

史跡比爪館跡が所在する箱(はこ)清(し)水(みず)の地名は、名水が湧(わ)く箱(はこ)清水(すず)に由来します。領主が樋爪氏から斯波(しば)氏に変わっても、大荘厳(だいしょうごん)寺の境内(けいだい)や五郎沼周辺は霊場(れいじょう)・聖地として、さまざまな信仰を形に表した供養(くよう)碑(ひ)や経塚(きょうづか)が築かれました。五郎沼の沼端(ぬまば)たでは、不(ふ)動(どう)明(みょう)王(おう)を絵画的に線刻した不動明王絵(え)像(ぞう)碑(ひ)が当時の信仰の姿を伝えています。

赤沢白山神社

赤沢白山神社は、およそ23 0 段の階段を昇り切った音(おと)高山(たかやま)の山頂に鎮(ちん)座(ざ)します。古くは「白(はく)山(さん)宮(ぐう)」と呼ばれ、一帯には蓮(れん)花(げ)寺(じ)が山岳伽(が)藍(らん)を構え、多くの平(へい)安(あん)仏(ぶつ)が安置されていました。音高山の麓(ふもと)や周辺には鎌倉時代の板碑などが集積する聖域となっていますが、近年この聖域に山城の遺構が確認されています。

比爪館跡　平安の　文化を広めし　比爪館

比(ひ)爪(づめ)館は、平泉藤原氏が志波郡に配置した北方支配の拠点です。比爪館跡は、平泉の都市理念が平泉以外で展開された数少ない平泉関連遺跡で、「第二の平泉」と呼ぶにふさわしい権威と格式を誇っています。その文化的影響は、比爪館跡周辺の関連遺跡のほか、中核部を取り巻く周縁の寺社・経(きょう)塚(づか)・平(へい)安(あん)仏(ぶつ)などの仏教遺産に及んでいます。

須川長之助

名誉町民須川長之助は、水分下(しも)松本出身の植物採集家です。牧(まき)野(の)寡(とみ)太(た)郎(ろう)が命名した「チョウノスケソウ」の発見者として知られています。日本列島のほぼ全域の植物を採集し、その標本をロシアの植物園に送り続け、世界の植物分類学の発展に多大な功績を残しています。「チョウノスキー」の学名が彼の功績を雄弁に物語っています。

走湯神社

走(そう)湯(とう)神社は、古くは「走(そう)湯(とう)大権現(だいごんげん)」と呼ばれ、熱(あた)海(み)の湧(わ)き出る霊湯(れいとう)「走り湯」を神格化したものです。源(みなもとの)頼(より)朝(とも)は陣ケ岡に滞在した際、「走湯権現に奉(たてまつ)る」と称して鏑(かぶら)矢(や)二本を欅(けやき)に射立てたことが『吾(あ)妻(づま)鏡(かがみ)』に記(しる)されています。頼朝にとって伊(い)豆(ず)山(さん)神社から分祀された走湯大権現が遠方の「比爪」にあったことに感慨を覚えたのかも知れません。

も

食文化（しょくぶんか）

餅振舞い（もちふるま）

胡麻に小豆に（ごまあずき）

胡桃餅（くるみもち）

め

陣ケ岡（じんがおか）

名将の（めいしょう）

滞陣あまた（たいじん）

陣ケ岡（じんけおか）

む

長岡八坂神社（ながおかやさかじんじゃ）

村人の（むらびと）

信仰厚き（しんこうあつ）

牛頭天王（ごずてんのう）

み

山王海ダム（さんのうかいだむ）

水喧嘩（みずげんか）

あってはならぬと

山王海（さんのうかい）

ま

承慶橋跡（しょうけいばしあと）

町と村（まちむら）

つなぐ架け橋（かはし）

承慶橋（しょうけいばし）

わ

水分神社（みずわけじんじゃ）

湧き出ずる水（わいみず）

幾千年（いくせんねん）

水分の里（みくまりさと）

よ

水飢饉（みずききん）

揚水の（ようすい）

静かに速し（しずはや）

稲植える（いねう）

ゆ

吾妻鏡による樋爪館（あづまかがみ　ひづめたて）

由緒知る（ゆいしょし）

吾妻鏡に（あづまかがみ）

樋爪館（ひづめたて）

や

東根山（あづまねさん）

山姿（やますがた）

こたつに似せて（に）

東根山（あづまねさん）

承継橋

承慶(しょうけい)橋(ばし)は、幕末に郡山の豪商金(かね)子(こ)七(しち)郎(ろ)兵(べ)衛(え)が、城山東側の北上川に私財を投じて普請した橋です。この橋は、藩主南部利済(としただ)が志和稲荷の帰路に長岡八坂神社を参拝するために架けた「御(お)成(なり)橋(ばし)」と伝えられていますが、北上川東西の村や町をつなぐ重要な役割を果たしました。普請には郡山城跡の石材が利用され、擬宝珠(ぎぼし)が取り付けられました。

山王海ダム

滝名川は、志和稲荷神社前で本流方と支流方の二つの水系に分岐されます。一つの用水源を盛岡藩と八戸藩で利用することから、水系同士の間で悲惨な水争いが起こり、死者まで出した悲痛な歴史があります。慢性的な水不足や水争いは、当時「東洋一のアースダム」といわれた「山王海ダム」の完成によって終止符が打たれました

長岡八坂神社

長岡八坂神社は、かつては「牛頭(ごず)天王」と呼ばれていました。牛頭天王は、疫(やく)病(びょう)を広める疫(やく)病(びょう)神(がみ)として恐れられましたが、逆にこれを丁(てい)重(ちょう)に祀(まつ)り鎮(しず)めることで疫病を退散させる除疫の神、さらには農業神など万能な神とされました。八坂神社は、長い歴史と格式がある神社として村人から厚く信仰されてきました。

陣ケ岡陣営跡

陣ケ岡は、古くから交通・軍事の要地として知られ、坂上田村麻呂(さかのうえのたむらまろ)・源(みなもとの)頼(より)義(よし)・源義家・南部信(のぶ)直(なお)・蒲(がも)生(うじ)氏(うじ)郷(さと)など多くの名将が滞陣(たいじん)したと伝えられています。奥州合戦では、源(みなもとの)頼(より)朝(とも)が陣ケ岡に一週間滞在したことが『吾妻鏡』に記(しる)されています。陣ケ岡は、前九年合戦、奥羽合戦、戦国期の合戦など、時代の変革期に登場する重要な史跡です。

食文化

古来、神聖な食べ物とされてきた「もち」は、自然の恵みに感謝し五穀豊穣、平安息災を祈る信仰と結びつき、神仏に供えられてきました。また、季節の行事や人生の節目など、「ハレ」の日の御(ご)馳(ち)走(そう)として振舞われて来ました。さまざまな素材を「もち」に絡(から)める「もち食文化」が現代に継承されています。

東根山

東(あずま)根(ね)山(さん)は、山(やま)姿(すがた)が台形に似ているため「こたつ山」とも呼ばれます。豊かな湧水(ゆうすい)をもたらす広葉樹の森が広がり、周辺の田園地帯を潤しています。麓(ふもと)には水分神社の奥宮(おくみや)が、水田地帯には里宮(さとみや)が鎮座します。宮沢賢治の親友である藤原嘉(か)藤(とう)治(じ)は、賢治の理想の村づくりの精神を実践するため、東根山麓の開拓や生活改善に尽力したことで知られています。

樋爪館跡

比爪館は、樋爪俊衡(としひら)の居館として鎌倉幕府の正史『吾(あ)妻(づま)鏡(かがみ)』に登場します。この館は、平泉藤原氏の北方交易を担った志波郡の政治・行政上の拠点と考えられています。館の外側に広がる遺跡群は平泉に匹敵し、平泉関連遺跡の中では最大規模といわれます。比爪館は、奥州合戦の際、樋　爪氏の手で焼かれ、その遺(い)構(こう)は地中に眠ったままです。

水飢饉(電気揚水)

大正末期から昭和初期にかけ、滝名川中・下流の旧赤石村は、水不足の村として全国的に知られていました。水不足の対策として北上川からの電気ポンプによる揚水(ようすい)事業が導入されました。電気揚水によって計画な田植えができるようになりましたが、「山王海ダム」の完成によって電気揚水はその使命を終えました。

水分神社

東(あずま)根(ね)山(さん)麓(ふもと)の水分(みずわけ)神社は、古くは「水分(みずわけ)大明神」と呼ばれ、近世初期に用水繁盛のため創建されたと伝えられています。「宇(う)迦(か)之(の)御(み)魂(たまの)命(みこと)」を祭神として、志和稲荷・志和古稲荷とともに信仰の礎(いしずえ)になっていました。明治期に祭神を「水(みく)分(まり)之(の)神(かみ)」、さらに「水(みず)波(は)能(の)売(めの)命(みこと)」に書き改め、名実ともに「水分(みくまり)の里」になっています。

ろ

来迎寺（らいこうじ）
六字名号（ろくじみょうごう）
願（ねが）いを込（こ）めて
川流（かわなが）し

れ

南部杜氏（なんぶとじ）
歴史（れきし）ある
郷土（きょうど）の地酒（じざけ）
蔵四（くらよっ）つ

る

蜂神社（はちじんじゃ）
瑠璃色（るりいろ）の
天（てん）にそびえし
一（いち）の鳥居（とりい）

り

七仏薬師像（しちぶつやくしぞう）
凛（りん）として
七（なな）つ薬師（やくし）の
立（た）ち姿（すがた）

ら

勝源院（しょうげんいん）の逆カシワ（さかさかしわ）
羅漢様（らかんさま）
仲良（なかよ）く遊（あそ）ぶ
門（もん）の中（なか）

勝源院逆さカシワ

勝源院(しょうげんいん)は、高水寺城跡に境内(けいだい)を構える曹洞宗(そうとうしゅう)の寺院です。寺伝では高水寺斯波氏の帰依(きえ)を得て開山し、江戸時代初期に花巻雄(ゆう)山(ざん)寺(じ)の末寺として再興されたと伝えています。参道入口には重厚・巨大な山門がそびえ、二階部分には十(じゅう)六(ろく)羅(ら)漢(かん)像(ぞう)が安置されています。この山門は、江戸時代末期に南日詰村の村人(むらびと)などの寄進によって建立されました。

七仏薬師像

赤沢薬師堂には中尊(ちゅうぞん)の左右に小さな脇(わき)尊(そん)を3体ずつ従えた七仏薬師像が祀られています。廃寺になった蓮(れん)花(げ)寺(じ)に安置されていた像と考えられています。中尊の高さは約1．3 メートルに及び、中尊と脇尊6体の七仏がほぼ制作時の状態を維持しています。このような形式の例は少なく、紫波町が全国に誇ることできる貴重な平安仏(へいあんぶつ)といえます。

蜂神社

奥州合戦の際、源(みなもとの)頼(より)朝(とも)は陣ケ岡蜂(はち)神社に一週間宿営したことが『吾妻(あづま)鏡(かがみ)』に記(しる)されています。蜂神社は、藩政時代には「八幡堂」と呼ばれていましたが、明治期に「蜂神社」と改称しています。陣ケ岡丘陵の西側遠方の田園地帯には朱(しゅ)塗(ぬ)りの巨大な「一の鳥居」が瑠璃(るり)色(いろ)の天にそびえ建っています。

南部杜氏

南部杜(とう)氏(じ)の源流は、近江商人村井権(ごん)兵(べ)衛(え)が旧志和村に伝えた池田流とされています。大坂池田流の「澄(す)み酒」の醸造技術が「権(ごん)兵(べ)衛(え)酒屋」に取り入れられ、地元志和郡の杜氏に伝えられました。紫波町では、4つの酒蔵が「南部流・南部杜氏」の伝統的な造りに、新たな技術や多様な嗜(し)好(こう)を融合させ「南部杜氏発祥の地」にふさわしい酒造りが行われています。

来迎寺

来迎寺(らいこうじ)は、日詰町発祥の地といわれる習(ならい)町(まち)に建立された浄土宗の寺院です。すべての仏・菩(ぼ)薩(さつ)の名前は名(みょう)号(ごう)といわれます。浄土門系では「南(な)無(む)阿(あ)弥(み)陀(だ)仏(ぶつ)」を「六(ろく)字(じ)の名号」といいます。「南無」は帰依(きえ)を意味し、阿弥陀仏への帰依を表しています。来迎寺では「南無阿弥陀仏」と書かれた短冊(たんざく)を北上川に流す「御(お)名(みょう)号(ごう)流(なが)し」が盆行事として行われます。